超短編物語集

藍

摩耗のランプ

とあるトレジャーハンターグループが数々の艱難辛苦を乗り越えようやく目的地にたどり着いた時には、総人数の三分の一の犠牲が伴われていた。 荒波にもまれ、たどり着いた島。そこで待ち受けていた獰猛な動物達。 島の中央にそびえ立つ、大きな山の中腹にぽっかりと開けられた洞窟には数々のトラップが仕掛けられていた。 その洞窟の最深部に、グループが捜し求めていた「お宝」があやしい雰囲気をかもし出しながら、祭壇とおぼしきものの上に置かれていた。 なんでも願いが叶うといわれている「魔法のランプ」だ。

隊長『・・・。ようやくたどり着いて、いざ実物をみてみたらだいぶイメージと違う代物だな。』

隊員A『・・・そうですね。なんかもっと金をふんだんに使ってキラキラ輝いているものを想像していたのですが・・・。とてつもなくさびてて、傷だらけですね。』

隊員B『まるで小石だらけの激流の川に流されて削られたあとみたいな感じですね。』

隊員C『普通川に流されて小石に削られた場合、丸みを帯びて綺麗になるんじゃないのか？』

隊長『そんなことはどうでもいい！言い伝えによれば、このランプを磨き上げれば、ランプの魔人が現れてなんでも願いを叶えてくれるらしい。とっとと作業に取り掛かるぞ！』

全隊員『ラジャー！！』
隊員３人がかりで、その割と大きいランプを磨き始めた。

隊員A『俺どんな願いを叶えてもらおうかなぁ～。やっぱ金かなぁ～』

隊員B『俺は大好きななあの娘とラブラブに・・・ぐふふ。』

隊員C『お前らなんでそんな現実的なお願いばっかなんだよ！』

隊員A『非現実的な願いだと叶えてくれないかもしれないだろ？』

隊員B『てゆうか非現実的な願いが思いつかねぇ。俺はこの恋が芽生えればその他もろもろどうでもいい。ぐふふ。』

隊員C『・・・・・・そうですか。』

約５分間磨き続けた時、ランプがぽぅっと光だした。そしてランプの先端から白い煙が噴出した。

隊長『な、なんだ！？なにが起こった！？』
全員が煙にむせた。しばらくして煙が晴れた時、目の前に全身半透明で緑色の体色をしている おそらくだが「ランプの魔人」が現れた。

グループ一同『おおぉ～！』

隊長『こ、こいつが魔人なのか！？』

隊員A『見た目ただのおっさんにしかみえません隊長！』

隊員B『髭だらけの中年男性にしかみえません隊長！』

隊員C『AとBの意見に対し、残念ながら否定の予知がありません隊長！』

隊長『バ、バカ！魔人様に対して失礼だろうが！』
しばらく肩を鳴らしたり、背伸びをしていた魔人が、ここでようやく口を開いた。

魔人『さて、それではわしの願いをきいてくれ。』

グループ一同『・・・・・・・・・・は？』

隊長『あ、あの・・・魔人様・・・。聞き違いでしょうか？今わしの願いをきいてくれとおっしゃいました？』

魔人『そうだ。わしの頼みをきいてくれと言ったのだ。おっとこれは失礼。先にランプから出してくれた礼を言わなければならなかったな。ありがとう。感謝する。』

隊長『いえ・・・あのぉ～・・・礼というなら言葉ではなく・・・その・・・我々の願いを叶えてくれませんか？』

魔人『は？何故わしがそなたらの願いを叶えねばならんのだ。人間が魔人様に対して敬意を払うのは当然のことだろうが。さてそれではわしの願いを聞け。わしは神に、このランプに封印されてからずっと外の世界を眺めていた。神が閉じ込められたままだと退屈だろうからと情けをかけて、外界の様子をモニタリング出来るようにしてくださったのだ。そしていつものようにぼんやりとモニターをみていたある日、わしの目にとある可愛らしいグループが映った。名を・・・たしかAKB・・・といったかな。全員途轍もなく可愛いグループだ。わしはこのランプから出れた暁には、このグループを直接みてみようと思っておったのだ。』

ここまで話終えて、魔人の鼻息が急に荒くなった。

魔人『つ、つまりわしは・・・AKBの握手会にいきたいのだ！どうしてもいってみたいのだ！ だから人間共！AKBの握手券とやらをとってきてくれ！わしには入手の仕方がわからん！ 握手券さえあればあとはわしが人間に変化して・・・』

神『黙れこのロリコン魔人！！』

魔人の話を遮って、突然神々しさを放つ物体が現れた。

神『まったく！お前はまるで反省してないじゃないか！お前の使命は人間の願いを叶えることだ！それを・・・２度も・・・こうもたやすく破るとはな・・・。もうお前は永遠にそのランプのなかに封印されておれ！！』

魔人『そ、そんな！神様やめてぇぇ！まゆゆぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっぅう！！！』
魔人は絶叫とともにランプに封印された。

神『いや～迷惑をかけてすまなかったな人間諸君。それでは我は帰ることにするよ。さらばだ！』
神は神々しい光を放ちながら、一瞬のうちに消えてしまった。辺りに静寂が訪れた。

グループ一同の思考『変わりに神様が願いを叶えてくれるとかじゃないんだ・・・。』

このグループがこれ以上トレジャーハントすることはなかったというのは言うまでもないことだろう。

神々会議

ここは神々が集う神聖なる場所、「ペテンシア」。
ここにいる神々は人間界を常に観察していて、人間達の動向によって喜怒哀楽をお与えになる。

神A『最近の人間共はやや度が過ぎてませんか？』

神B『そうですな。地球の大気が年々汚れてきておる。これは彼らも実感しているようで、「地球温暖化」と呼んでいるらしいですぞ。』

神C『人間達も、色々と改善しようとはしてるが一向にその兆しがみえんからのぉ。それに我々がちょちょいとなおしてしまっては彼らのためにならんしのぉ。人間達が良い行いをすれば、それに見合った「報酬」をあたえ、悪い行いをすれば「罰」を与える。それが我々の仕事だ。 今回の「地球温暖化」とやらはそれなりの「罰」を与えねばならんようじゃのぉ。』

神D『それでは「罰」を実行する・・・ということでよろしいかな？』

神A,B,C『異議なし。』

現在２XXX年。神々の「罰」が実行されてから５００年近くが経過していた。
その間に何が起こったかというと・・・。

全人類の体から「毛」が異常に生え始めていた。一日一日を過ごすたびに、徐々に体毛が生えてくる。

もちろん人々はそれをそっていく。
それでも、そってもそっても生えてくる。

世界中の研究者達がやっきになって研究するが、何も解決策が出てこない。

そして「体毛」の他に、もうひとつの「変化」がもたらされた。

思考能力の低下、知識の欠如だ。 人間の脳の平均的それは、猿並みのそれになっていった。 というより、人間は猿それ自体になっていった。

歴史の教科書で一度は目にしたことがあるであろう。 アウストラロピテクスから始まり人間に至るまでの簡単な経緯を。 人類はこのたった５００年の間に、人間に至るまでの経緯を「逆戻り」していった。
しかし人類が「退化」していくにつれ、地球環境は徐々にではあるが、回復していった。 「科学力」がなくなり大気を汚染する原因が取り除かれたからだ。
そして人類・・・いや、猿人類は本能的に古代の生活スタイルを再現していくのであった。

神A『人類が、また同じ過ちを犯さぬよう祈るばかりですなぁ。』

神B『そうですな。祈られる側の我々が言うのもなんですがね。』

神C『それはそうと、今日の議題はなんでしょうか？』

神D『今日の議題は、我々が隕石によって滅亡させた「恐竜」をまた復活させてみては・・・・・・・・・』

神々会議が今日もどこかで厳かに始まります。

アリポーター

私は、数々の巣穴の実態を調べあげてきた敏腕アリポーター。さて今日はどんな実態が待ち構えているのでしょうか。

アリポーター『ごめんくださーい。ちょっと取材させてもらってもよろしいでしょうかぁー？』

巣穴に向かって叫んでみたが返事がなかった。アリポーターは躊躇なく、その小さな巣穴へと進入した。
中はとても静かだった。他の地域の巣穴は「働きアリ」がせわしなく食べ物を運んでいてとても騒がしかったのだが・・・。
もう誰もいないのだろうか？ しばらくとぼとぼ歩いていると、前方から子アリが２匹、こちらに向かって走ってきた。

子アリＡ『おい急ごうぜ！』

子アリＢ『ちょっと待ってくれよ！アレ？』

アリポーターに気づいた子アリ達は、アリポーターの前で停止した。不思議そうな顔をしてこちらを見上げていた。

アリポーター『あ、私・・・アリポーターのアリスといいます。ちょっとこの巣穴の取材をしにきたんですけど、女王様はいらっしゃるかなぁ？』

子アリＡ『アリーポッター？』

子アリＢ『アーリポーター？』

ん？その聞き違いは「ハリーポッター」と「ターミネーター」のことかな？でもどうしてこの子達が人間界の事を知っているんだろう？私はリポーター魂で人間界の事もある程度調べているから分かるんだけど・・・。

子アリＡ『あぁ、女王様の場所は、ここをまっすぐ行って右に曲がって下に行って左に行って、それから・・・』

アリポーター『ちょ、ちょっと待ってメモするから！』

子アリ達と別れた後、メモを頼りに女王アリの部屋を探して、そしてたどり着いた。中には数匹の働きアリと、女王アリの一匹しかいなかった。他の巣穴の女王部屋は、もっとごっちゃごちゃなのだが・・・。

アリポーター『私、アリポーターのアリスと申します。この巣穴について取材させていただきたいのですがよろしいでしょうか？』

女王アリ『しゅざい・・・ですか・・・・・・・・・好きにしてください。』

明らかに不機嫌だった。何があったのだろう。

アリポーター『あ、アリがとうございます。最初に尋ねたいのですが、働きアリはこの部屋にいる方々だけでしょうか？』
女王アリの触覚が、ぴくんと動いた。数匹の働きアリの表情が一気に暗く沈んだようにみえた。いきなりこの質問はまずかったかな・・・。そう思った。

女王アリ『働きアリは・・・この部屋にいる・・・のみです。他の働きアリ達はみんな出ていってしまいました。人間界に遊びに行ってしまいました。働かない・・・ニートです。』

アリポーター『ニートですか！？』

他の巣穴のアリはちゃんと働いてるのに、ここの連中はニート！？びっくりだ。 いや、それ以上に女王アリが「ニート」という言葉を知っていることにびっくりだ。

女王アリ『ええ。今この辺りの巣穴は、どれも働きたくないアリニートで溢れています。一匹のアリが人間界の娯楽に触れて、その楽しさを他のアリ達に広めてからこの巣は変わってしまいました。私達だけならまだしも、他の巣穴の方々にも広まってしまって・・・。バイオハザードみたいですね・・・ハハ。』

そうか。だからさっき出会った子アリ達は人間界の事を知っていたわけか。しかし・・・・。

アリポーター『女王様も・・・色々知ってそうですよね。人間界の事』

女王アリ『え？ええ、まぁ。巣に帰ってきた子達から面白そうな話をたくさん訊きますから。

「ニート」という言葉も子供達から教えてもらいました。子供に、「母ちゃん、俺・・・・・ニートになる！人間界で流行ってるんだぜ！ニート！」と言われた時はショックでした。』

アリポーター『それは・・・とんだとばっちりでしたね・・・。』
女王アリ『そうです。人間界で起こる事は直接アリ界に影響しますから、彼らにはちゃんと働いていただきたいものです。アリポーターさん。どうかこの事態を人間界に伝えてください！』

アリポーター『え！？は、はい分かりました！』

・・・いや。無理ですそれは正直。私の仕事は人間界にアリ事情を知らせることじゃアリませんから。殺されます。
しかしこんな複雑・・・ともいえない事情があったとはね・・・。働きアリが働かなくなるとか・・・。世も末だな・・・。
そう・・・思いました。

その後一時間に渡って取材を続け、なんとか終了。 女王アリもなんだかんだ言って、人間界に遊びにいきたそうでした。

クレーンゲーム

俺は人通りの多い街中を、一人でとぼとぼ歩いていた。 周りの「連中」の楽しげな顔をみているとイライラした。
「連中」のなかでもカップルは、みているだけで殺意が沸くレベルだった。俺の彼女は・・・・・・もう・・・。

俺の彼女はつい先日、一緒にいる時に突然倒れた。
血を吐き、胸のところを両手でおさえながら床に倒れこんだ。
俺は救急車を呼んだ。
そして彼女は数分後にやってきた救急車に運ばれて病院に送られた。

とても重い病気だった。

余命２ヶ月と宣告されてしまった。

俺のなかで、何かが崩れ落ちる音がした・・・。

彼女は「あの日」からずっと、病院のベッドの上で目を閉じたままだ。 彼女の変わらない表情をずっとみているのに耐えかねた俺は一人、あてもなく出かけることにしたのだった。

悲しみに暮れ、猫背になり下を向いて歩いていた。

ガヤガヤピコピコ。

・・・前方が騒がしい。

俺は顔を上げて前をみてみる。どうやらゲームセンターが音源のようだ。
俺はその音源に導かれるようにゲームセンターのなかに入っていった。
店内は割りとにぎわっていた。コインゲーム、格闘ゲーム、シューティングゲーム。どのタイプのゲーム機にも人だかりができている。
俺はクレーンゲーム機が密集しているエリアに行ってみた。もちろんここにも人がちらほら窺える。しかし、エリアの一角に全く人がいない空間がひとつあった。とあるクレーンゲーム機の前だ。俺はそのゲーム機の前まで歩き、中の商品を確認してみた。

俺「あぁ・・・。これは誰もやらねぇよ・・・。』

商品は硬式野球ボールサイズのゴムボールだった。全て白色である。特徴的なのが、その白色のゴムボールに黒字で文字が書いてあることだ。
「恋愛」「学業」「金」「仕事」「殺」「命」とひとつひとつのボールに様々な単語が書かれていた。俺は「命」と書かれたゴムボールに目を惹かれた。
俺『こんなんで誰かの命が救えるなら医者はいらねーんだよ・・・。』
そう言いつつも、俺はそのゲーム機にお金を投入していた。 湾曲したアームが３本ついたクレーンが、ゆっくりと動き出した。ずっと操作されず、久しぶりだったので動き方を思い出すまでに時間が掛かった、とクレーンが言っているような動き出しだった。
俺が狙うのは「命」と書かれたゴムボール。命がたった１００円のクレーンゲームで買えるなんて安すぎると俺は思った。そもそも命に値はつけられないが。

ゴムボールはなんともあっさりと取れてしまった。３本のアームががっしりとゴムボールをつかみ、そのままゲートへと運んでいった。
俺は商品の取り出し口からゴムボールを取り出した。命という単語が黒の太字で書かれている。

俺『何やってるんだろ・・・俺。こんなんであいつが助かるわけ・・・』

俺が言葉を言い切る前に、ポケットに入れていた携帯電話が着信音を立てた。画面をみてみると、彼女の父親からの着信だった。俺はすぐさま着信にでた。
父親『〇〇君かい！？娘の・・・・・・娘の容体が急に良くなってきてるって・・・・・・・・先生が・・・先生がおっしゃっているんだよ！どうしてこんな事になったのか全くわからないらしいのだが・・・・・・良かった・・・とにかく良かった・・・。君も今すぐ来てくれないか！？』

俺『ほ、本当ですか！？わかりました！今すぐそちらに向かいます！』

父親『あぁ！気をつけてな！』

俺『ハイ！』

どうして急に容体が・・・！？このゴムボールのおかげなのか？なんにしても良かった！またあいつと一緒に過ごせる！デートして笑ったり泣いたり、瞼を閉じた時以外のあいつの表情をみることが出来るんだ！
そんなことを考えながら、俺は勢いよく店を飛び出した。

すると突然、立ちくらみした時のような感覚に襲われた。体がフラフラする。

気づけば俺は、大量の血を吐いていた。周りから悲鳴が聞こえてきた。 どんどん地面が近づいてくる。いや・・・。俺が倒れこんでいるから近づいているようにみえるだけだろう。
なんで・・・こんなことに・・・？
薄れゆく意識のなかで、俺はずっと彼女のことを考えていた。

命を救う「対価」がお金だけで済むはずがありません。

もしもこんなクレーンゲームをみつけたらご注意を・・・。

水着ブーム

８月。季節は夏。猛暑が続き、熱中症で人が何千人と病院に運ばれる夏。

若者の街、渋谷のハチ公前。
通りを行き交う人々の視線は、自然とその「集団」に引き寄せられていた。

男５人、女５人の集団で、年齢は２０代前半といったところだろうか。それだけなら目を惹きつける要素はないのだが、もちろん「それだけ」ではない。
彼・彼女らは全員水着のビーチサンダルという格好だったのだ。

男５人は全員、トランクス風の水着を履いていた。ポケットがふくらんでおり、おそらく財布や携帯電話がはいっているのだろう。

女５人はそれぞれがそれぞれの好みのタイプの水着を着用しているようだった。ただ、一人も布面積の少ない水着は着用しておらず、全員かわいらしいキャラクターが描かれたタオルを首に巻いていた。そして手には小さめのバッグを提げている。

彼・彼女らは、結構な音量で立ち話をしていた。

『ちょっと今日マジで暑くね？』とか『のど乾いたぁ～』とか『水着超爽快だね！絶対これ流行るでしょ！』などのセリフがきこえてきた。

この水着集団は渋谷だけでなく、新宿・池袋等にも度々出現し、若者のあいだで大きな話題を呼んだ。そして日を追うごとに街中を水着で普通に歩く若者が、少しずつだが増えていった。見よう見真似というやつだ。
これらのことがＴＶで報じられてからは、ますますこの「若者水着人口」が増えていき、「水着ブーム」が巻き起こった。渋谷・池袋等の「若者の街」は水着の若者で溢れかえった。

街中を水着で闊歩するというのは法律的にはとてもシビアなところだ。あまりにも大胆な水着を身に着けていると、軽犯罪法に触れる恐れがあるが、過激なビキニ等を着用している若者はいない。それにここまでブームが広がってしまい、卑猥な感じがまるでしないとなると警察も迂闊に注意出来ないということで、この猛暑が続いている間はブームが収まることはなかった。

この「水着ブーム」により水着は飛ぶように売れたが、逆に私服の売り上げが激減した。

そしてこの状況をみて一人、不敵な笑みをこぼす人物がいた。 とある大手水着メーカーの社長である。社長は、自分が経営するビルの社長室の窓から眼下を見下ろし独り言を呟いた。

社長『「ブーム」にはそれを起こす「仕掛け人」というのがかならずいるものなんだ。しかしたった１０人の「サクラ」でまさかここまで広まってくれるとは思わなかったな。おかげでうちの売り上げは去年の夏の売り上げの５倍を記録した。儲けさせてもらったよ・・・・・・・ 若者諸君。ふっふっふ・・・。』

社長の不吉な笑い声がいつまでもその社長室に響き渡っていた。